

金志映氏の「戦後日本の文学空間における「アメリカ」—占領から文化冷戦の時代へ—」は、1945年の日本の敗戦にはじまる占領期から、1951年のサンフランシスコ平和条約調印を経て東西冷戦期にいたる時期に、「アメリカ」と向きあうかたちになった日本の文学者の文学的営為を、戦後の歴史的文脈のなかに辿った労作である。

戦後の日本において、アメリカはGHQの民間情報教育局（CIE）を通じて強力な対日文化政策を推進した。日本の民主化と非軍事化を目的とした様々なメディア戦略や人材養成プログラムは、民間検閲局（CCD）による検閲とともに、戦後の日本の言論空間、文学空間に大きな影響の痕を残した。

講和直後の1953年に立ち上げられたロックフェラー財団の創作フェローシップは、1960年代初頭にいたるおよそ10年間に、戦後の日本文学を担った多くの文学者にアメリカ滞在の機会を与えた。福田恆存、大岡昇平、石井桃子、阿川弘之、中村光夫、小島信夫、庄野潤三、有吉佐和子、安岡章太郎、江藤淳といった人々である。本論文は、アメリカの対日文化政策の枠組みと施策、ロックフェラー財団が50年代の冷戦期において果たした政治的役割をふまえて、これら文学者たちが向きあった「アメリカ」の意味と、文学的表現に現れる「アメリカ」の姿を、歴史資料と文学テキストそのもののなかに探ろうとする。それは、『自由と禁忌』（1984年）における江藤淳の自問「ロックフェラー財団研究員とは、いったい何だったのだろうか？」に、一つの答えを示そうとする意欲的な試みである。

本論文は、第一部「占領期のGHQ文化政策と「アメリカ」の表象」に収める第一章「占領期の文化／文学が創出される場」と第二章「戦争と占領の表現における「アメリカ」」二部「ポスト講和期の日米文化交流と「アメリカ」の表象」に収める第三章「ポスト占領期の日米文化関係—文化冷戦の時代—」と第四章「日米文化交流と文学場—ロックフェラー財団文学者留学制度を中心に—」、第三部「ロックフェラー財団フェローの描いた「アメリカ」」に収める第五章「阿川弘之『カリフォルニア』における「アメリカ」—文化冷戦下のエスニシティの表象として—」と第六章「小島信夫の描いた同時代の「アメリカ」—『異郷の道化師』にみる人種・言語・生活様式—」と第七章「ナショナル・ヒストリーから個の語りへ—有吉佐和子『非色』における〈戦争花嫁〉の「アメリカ」—」、及び「序章」と「終章」からなる。以下、論文の構成にしたがって、概略を述べる。

「序章」は、戦後におけるアメリカの対日政策、冷戦期文化政策に関する幾多の先行研究を概観した上で、本論文が、ロックフェラー財団創作フェローシップに関する記述を一つの焦点と定めつつ、具体的な文学テキストの読解を重んじた比較文学研究であろうとすることを述べる。

第一章は、GHQの対日文化政策とCCDの検閲についての歴史的事実を辿り、それがアメリカが望む「アメリカ」が構築されようとする場であったことを確認する。第二章は、第一節において大岡昇平の『俘虜記』（1952年）、第二節において阿川弘之の『魔の遺産』（1953年）をはじめとする諸作品、第三節において小島信夫の「アメリカン・スクール」（1954年）を論じる。『俘虜記』を占領下日本のアレゴリーとして読みうること、広島への原爆投下を描いた阿川の初期作品に「アメリカ」の不在が指摘できる一方、『魔の遺産』が原爆投下国アメリカを強く意識させる作品になっていること、大岡と阿川の作品がいずれもアメリカによる検閲の痕を残す作品であること、小島の「アメリカン・スクー

ル」が占領体験に関する日本人の集団的記憶を物語化した作品として、戦後の「アメリカ」表象の代表例となることなどが、その論点となる。

第二部第三章は、講和後のアメリカの対日文化政策とロックフェラー財団の活動の概要を記述する。冷戦期に入ると、日本の「西側志向」を強化することがアメリカの重要課題となった。国務省顧問ジョン・フォスター・ダレスの要請を受けて対日政策の文化顧問となったロックフェラー三世は、多岐にわたるプログラムを展開した。その事実がロ財団文書館から発掘した資料を駆使して詳細に述べられる。続く第四章ではロ財団の文学者留学制度に焦点が絞られる。創作フェローシップの運営と具体的人選においては、アメリカ側のチャールズ・B・ファーズと日本側の坂西志保が中心的な役割を果たした。その具体的な選考過程と派遣後の報告書をめぐるやりとりが、ロ財団文書館所蔵の手紙等を引用しつつ生々しく再現され、留学制度のほぼ全貌が明らかにされる。第三章と第四章は、幾多新発見の資料を織り込んだ、本論文においても重要な部分であると認められる。

第三部では、ロ財団フェローシップによりアメリカを実見する機会を与えられた文学者のうち阿川弘之、小島信夫、有吉佐和子の作品に描かれる「アメリカ」が、それぞれ第五章、第六章、第七章において論じられる。渡米後の阿川においては初期の原爆の主題が消え、代わって日系アメリカ人の生活が小説『カリフォルニア』（1958年）において描かれた。それは移民としての苦難を乗り越えた典型的な成功物語として語られるが、生活描写の細部において米国広報文化交流局（USIS）が制作した教育宣伝映画に通じるものを持つことが鋭く指摘される。

小島信夫はアイオワを拠点とした滞米体験を『異郷の道化師』（1970年）にまとめた。小島はアメリカの農家に寄宿して日々の生活を共にし、異言語・異文化に関する体験を文化的他者の認識として作品のなかに描いた。そこには他者との交流が「恥ずかしさ」として表現されるとともに、アメリカ的生活様式を相対化する視点も盛り込まれている。

作家として出発したばかりの有吉佐和子の渡米は、「才女」の留学としてメディアの注目を集めた。主にニューヨークに滞在した有吉が着目したのはアメリカにおける人種問題であった。『非色』（1964年）は黒人の進駐軍兵士と結婚してハーレムに渡った「戦争花嫁」を描き、『ぷえとりこ日記』（1964年）はプエルトリコ旅行での見聞にもとづく人種偏見の問題を描く。女性作家としての有吉は、女性の立場から戦後日本の占領体験と同時代アメリカ社会の病を浮かびあがらせようとした作家として評価されるのである。

終章は、文化政策としてのロ財団の創作フェローシップの意味とその影響の痕を改めて確認し、今後の研究の展望を示す。

審査委員からは、テーマ設定の今日性、ロ財団関係資料の資料的価値、広範囲に及ぶ引例の豊富さ、日本語表現のたしかさ等への高い評価が示された。テキストを深く読み込み、地道に粘り強く解釈しようとする姿勢は、本論文の特色をなすものである。一方で、戦前・戦中期との歴史的連続性と断絶に関する文脈の提示が薄いこと、冷戦期の政治史研究において尚参照すべき先行研究が多数存在すること、資料として引用される文学作品の文学的評価の問題を看過すべきではないことなど、本論文が今後克服すべき課題も示された。本論文では詳述を避けている他の文学者たちに関する研究も残されている。ただし本論文が拓いた視野は、広く東アジアにとっての「アメリカ」を考察する上で、貴重な足がかりを提供しており、占領期と占領期直後の冷戦の時代における日本の社会と文学に関する歴史記述として、十分に優れた成果を収めたと認められる。

以上の判断により、本審査委員会は、金志映氏の学位請求論文が、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであると認定することに、全員一致で合意した。